

〔国 語〕

目的意識をもって追求し、相手を意識して論理的に表現する力の育成

－問題解決的学習と「読む」「書く」繰り返し学習を取り入れた説明的文章指導を通して－

富永 浩文*

1 主題設定の意図

論理的な文章は、表現する目的や伝える相手を強く意識して、様々な事項を相互に関係付けたり、明確な根拠や事実を補ったりして、自らの考えを相手に強く説得するべく表現する文章と考える。ところが、切実感に支えられた目的意識を子どもたちに喚起し、持続させることは難しい。また、相手を説得させるに足る経験的知識や情報も必ずしも多いとは言えない。さらに、表現形式、文体、用語といった言語能力の習得の速さも一様ではない。

筆者は、説明的文章の指導においては、子どもたちが目的意識に支えられた意欲的な追求活動を行うことにより、論理的思考をもとに効果的に自らの考えを表現していけるよう学習の展開を構想することが必要だと考える。特に、今日、新しい読解力としてのPISA型読解力が注目され、学習者の側に立って、「考えることを中核とした、『読むこと』『書くこと』を連携させた指導」¹⁾の必要性が叫ばれている。子どもたちが目的意識をもって、自ら情報収集、選択、まとめ、発信する過程で、説明的文章の表現に学ぶ一方、多様な体験や資料から得たものを有効な情報として活用し、自らの考えを説明的文章として情報発信に生かしていくことが必要と考える。

その意味から、子どもたちが、実生活における経験との関連で、自ら問題を設定し、目的意識をもって追求し、その解決を図る過程で、「読むこと」、「書くこと」を連携させた指導を行いたい。そして、それにより子どもたちに論理的な思考力や説明的文章による表現力を身につけさせたいと考える。以上のことから、上記主題を設定した。

2 研究の目的

本研究は、説明的文章を読むことによって生じた子どもたちの問題意識を出発点として、子どもたちの実生活と結びつく体験的活動を取り入れた問題解決的学習活動を工夫して展開するとともに、その中で繰り返し学習する場面を重視することにより、子どもたち自らが、様々な情報を収集、整理、活用しながら、論理的思考力、説明的文章表現力を高めていくことができるということを明らかにする。

3 研究の内容及び方法

(1) 説明的文章指導において、情報活用能力の育成を視野に入れた問題解決的学習過程の構想

論理的文章表現力を育成する上では、情報活用能力の育成が不可欠と考える。子どもたちが、問題意識をもち、課題を設定し、情報収集していく過程では、取り扱う題材について書かれた文章情報にふれることが多い。様々な表示、パンフレット、文献や資料など、その多くは説明的文章であり、それらを読み、内容を理解することが必要になる。また、調べたことをもとに、まとめ、表現、発信していく上でも、説明的文章にふれる。情報源にあたること、引用すること、さらに、それらをもとに、自らが論理的な思考力を働かせて説明的文章を書くことが必要となる。このことから、国語科の視点で、身近な事象から課題を設定し、情報収集、情報選択と編集、情報のまとめ、情報の発信という一連の活動を展開し、情報活用の仕方を学び、情報活用の実践力を身に付けることによって、論理的思考力を高め、説明的文章の理解や表現の力も高められると考える。

そこで、本実践において、上述の情報活用能力の育成を考慮に入れた問題解決的な学習過程を構想しようと考えた。子どもたちが論理的に文章表現を行うためには、机上だけの構想では不十分である。論理性と実感性とは相互に補完しあってより強固な認識が作られる。体験によってえられる実感的な情報がより説得力を持つ材料となる。実際に五感を働かせて体験し、それによって得られた諸情報により自らの考えを確かに実証できるような活動を構想するこ

* 妙高市立新井小学校

とが必要と考える。その過程で説明的文章を活用したり、説明的文章を「読む」「書く」活動を取り入れたりして、実生活との関わりで「読む」「書く」力を総合的に育てようと考えた。また、活動を行っていく際は、それぞれの子どもたちが、自分の力で主体的に追求を行っていくことができるよう、ワークシートを利用し、個々の問題解決の過程を見取り、支援していくための手段にした。

(2) 論理的な文章表現力の確かな定着と向上的な変容を促すための、「読む」「書く」の繰り返し学習の構想

論理的な文章表現力を育成するためには、まず、基礎的、基本的な事項を繰り返し学習する中で、それらを確実に定着させ、自らが文章表現していく上での基礎を作ることが必要と考える。そこで、次のような点に留意した指導を構想した。

まず、教材として扱う説明的文章を読み込む活動を重視することである。説明的文章の理解にとって必要なことは、説明的情報、すなわち、書かれている内容や筆者が意図することを的確に読み取ることである。そのために、文章構成や語句の使い方、文末などの表現を手がかりに、筆者の主張の軽重や表現の工夫について繰り返し読み込むことにより吟味しようと考えた。特に、説明的文章においても、音読したり朗読したりする活動を取り入れることにした。音読、朗読技術の向上は、より深い内容解釈を必要とする。学習過程において、問題意識をもつ段階、自らの考えを説明的文章として表現する段階、それぞれで音読、朗読の活動を取り入れることにより、確実な定着を図ろうとした。

次に、「読むこと」と「書くこと」との連携を重視することである。様々な説明的文章を読むことは、文章表現力の基礎を身につけ、その能力を高める上で有効である。読む活動によって、表現活動に主体性をもたせることができると考える。須藤（2005）は、論理的文章の構成を指導する際、「読むことと書くこととの関連指導」²⁾を重視して、そこから段落の役割や文章構成の方法を読み取らせようとしていた。尾矢（2006）も、説明文指導において『『書くために読む』という学習過程を構成し、説明文に見られる文章の論理性を子どもが自分の表現に取り入れ、論理的な文章表現力を身につけることができる」³⁾ことを明らかにしている。説明的文章を読み、その表現に学び、自らの表現に生かしていくとともに、書いた文章を、目的や相手を意識して自ら読み、書き直し読み質的な向上を図る。このような活動を重視した活動を学習過程に位置づけることにより、文章表現力の向上的変容を子どもたち自身に実感させたいと考えた。

4 実践の概要

(1) 単元名 第6学年 ともに考えるために伝えよう 「みんなで生きる町」 （光村図書 6年上）

(2) 単元の計画と各次における主な活動 全18時

1次（2時間） 学習の見通しと課題設定（問題解決的な学習過程1）

- ・教科書の教材を読み込むとともに、様々な資料をもとに、ユニバーサルデザインに対する興味・関心、問題意識を高めるとともに、課題を設定し、自らの生活に目を向けながら、学習していく計画を立てる。

2次（6時間） ユニバーサルデザインの発想から身の回りの施設・ものの調べ（問題解決的な学習過程2、3）

- ・自らの問題を設定し、場所を決めて追求計画を作成、取材活動を中心とした意欲的な追求活動を行う。
- ・デジタルカメラにより映像を記録し、効果的に説明するための資料として活用できるようにする。

3次（6時間） 追求結果（情報）の整理、まとめ、発信、評価（問題解決的な学習過程4、5、6、7）

- ・追求結果を整理するとともに、見本となる紹介文を読み込み、文章構成を参考にして、紹介文を構想する。
- ・型を参考にして、紹介文を書き、繰り返し声に出して読み込み、推敲しながら文章の質を高める。
- ・写真をもとに小グループ、大グループと相手意識をもって発表を行い、意見交換を行い、考えを深める。

4次（4時間） 再考・再発信（問題解決的な学習過程8）

- ・深まった考えをもとに、新たな目的意識と相手意識により、より使いやすい施設・ものについて提案文を書く。
- ・繰り返し声に出して読み込み、推敲しながら文章の質を高める。
- ・文化祭において提案を掲示し、学校や地域に発信するとともに、自らの変容を事後評価する。

(3) 問題解決的な学習過程、情報活用能力育成のステップ

単元において構想した問題解決的な学習過程と情報活用能力育成のステップとの関係は表1の通りである。子どもたちがそれぞれのレベルで主体的に問題解決を行うことができるよう、毎時間ワークシートを活用した。そして、その記録を見取りながら、個々に追求を支援していった。また、習熟、定着を図る場面、曖昧さを解消したり、質的な

向上を図ったりする場面では、繰り返し学習を行い、自らの力で向上的な変容を図れるよう支援していった。

表1 問題解決的な学習過程と情報活用能力育成のステップ

問題解決的な学習過程	情報活用能力育成のステップ	具体的な方法・場面 ○ワークシートによる学習活動 ●繰り返し学習
1. テーマを決める ・教材をもとに興味関心を高め、問題意識をもつ。 ・追求したいテーマを決定する。	◇課題の把握と テーマの設定 ▼	○教科書の教材文の読解 ○様々な図・写真の読み取り ○問題意識の喚起 ●教材文の音読
2. 追求計画を立てる ・目的意識をもつ。(なんのために) ・方法意識をもつ。(どんな方法で)	◇情報収集の計画 ▼	○追求計画 ○グループでの話し合いを行い、計画を具体化
3. 調べる(追求する) ・調べる方法を学ぶ1(観察、実験、インタビューの仕方、メディア活用の仕方) ・調べる方法を学ぶ2(文献、資料の調べ方、メディア活用の仕方) ・情報を集める。	◇情報・資料の 収集 ▼ ▲	○追求(情報収集)記録 ○インタビューによる聞き取り ・デジタルカメラによる記録 *本単元では文献、資料等の活用は、行わない。 (「平和のとりでを築く」において)
4. 調べたことをもとに情報を整理する ・知らせたいことを整理する。 ・自分の主張をはっきりさせる。 ・必要な材料を選ぶ。・全体の構成を考える。	◇情報の整理・ 分析 ▼	○追求の整理・まとめ ●必要に応じ情報の再収集にフィードバック ・必要な写真資料の選定(1～2)
5. まとめる(論理的な説明的文章を書く) ・相手意識をもつ。(だれに伝えるために) ・段落を考え文章を書く。 ・一次原稿を書く。・読んで推敲をする。	◇情報の加工 ▼ ▲	●見本となる原稿(資料)の朗読 ○一次原稿作成(原稿用紙) ○二次原稿作成(原稿用紙) ●自分の原稿に、朗読記号をつけ、読み込む。
6. 伝える(発信) ・場を意識する。 ・資料を効果的に使う。 ・話し方を工夫する。	◇情報の伝達・ 発信 ▼	●原稿と写真資料をもとに、発表練習(朗読) ●小グループによる模擬発表会 ○発表評価カード ●原稿の推敲し、再度練習 ●大グループでの発表会の開催
7. 振り返る ・自己評価及び相互評価する。	◇活動の振り返り ▼	○発表評価カード ●評価カードをもとに話し合い
8. 考えを深め、発展させる ・評価をもとに、考えを深め、相手を意識した意見文にまとめる。	◇情報の再発信	●相互評価をもとにした意見文 ○意見文をもとに提案書の作成

(4) 問題意識をもち、課題を設定する姿(目的意識に支えられた追求意欲の喚起)

問題意識を強くもたせ、目的意識をもって追求することができるようにするため、教材文を繰り返し読み、論旨をワークシートに構造化してまとめながら、筆者の主張について話し合いを行った。朝活動や家庭での学習も含め、全員が20回以上教材文の読み込み(音読)を行った。その中で、子どもたちは、教材の説明的文章の表現に慣れ、思考の形式、論理の筋道、説得の構造を理解するとともに、単元で学習する目的を理解していった。

また、教科書の写真やその他の資料を提示し、ユニバーサルデザインの考え方について話し合いを通してイメージをふくらませるとともに、実生活の中で同様な状況や場面、問題を想起させ、追求意欲を高めていった。特に、当校は、学校周辺に、文化ホール、コミュニティーセンター、図書館、体育館、病院他多くの公共施設が立地し、公共施設におけるユニバーサルデザインについて、実生活との関わりから問題意識を高め、追求意欲を高める上で好条件にあることから、子どもたちの問題意識、追求意欲を、普段の学習に比し、大いに高めることができた。そして、小グループの話し合いにより、問題意識を調整し、テーマを設定(目的意識の明確化)、追求の計画を立て活動を行った。

(5) 観察、調査等の体験活動を通して追求を行い、意欲的に情報収集する姿(主張を裏付ける事例、経験の蓄積)

グループごとに、使う人のことを考えて設置されているユニバーサルデザインについて、見学場所を決め、事前交

渉を行い、観察、調査を行った。その後の情報活用を効果的に行うことを考えて、デジタルカメラを携行し、情報収集活動を行った。普段何気なく利用している場所を、ユニバーサルデザインという視点から五感を通して体感することによって、子どもたちは、驚きを伴う新しい発見や気づきをもち、追求意欲をさらに高めていった。その施設の設置意図を、実際に利用して、利用する人の立場から実感として理解することができた。また、追求する中で生じた疑問は、施設の人にインタビューするなどして問題解決していった。

このように、説明的文章による論述を論理的に進める上で必要な事例や根拠となる経験を、体験的な活動を通して得ることができた。同時に、自らが強く伝えたいと願う情報を収集することができたと言える。

(6) 情報を吟味、整理、選択しながら、意欲的に自らの紹介文の構想を練る姿（説明的文章の構想）

説明的文章を構想する際には、全ての子どもが、体験によって得られた情報をもとに、ユニバーサルデザインについて自らの考えをもとにした紹介文を書くことができることを目標にした。追求意欲が実際の成果に結びつかなければ、向上的な変容を自らが実感できないと考えたからである。そして、ワークシートをもとに、図1のように形式、構成を統一して説明的文章を構想させることにした。教科書においてはメモをもとにした発表を前提としていたが、論理的に表現する力を育てていくためには説明的文章に表現させた方がよいと考えた。

収集してきた情報をグループごとに吟味し、整理し、取捨選択しながら、自分が伝えたいユニバーサルデザインを選んだ。必要な情報としての価値が乏しい場合は、再度取材を試み納得がいく情報を収集しようとしていた子どももいた。目的意識がグループによるものから個人のレベルへと移行し、自らが発見したことを、自信をもって紹介したいという意欲を捉えることができた。能力的には差異が認められるが、全ての子どもが、一定の形式に則りながらも、個性的な感性を発揮し、実証性に富んだ説明的文章を構想することができてきた。

- ①紹介する事象の提示
選定したユニバーサルデザインの明示。
- ②事例1 状況の説明
ユニバーサルデザインのある場所、具体的な状況の紹介。
- ③事例2 施設の説明
ユニバーサルデザインの特徴の紹介（できるだけ詳しく）。
説明を助ける効果的な写真の選定、採用（1～2枚に限定）
- ④考え・意見・疑問点の主張
気づいたこと、分かったこと（ユニバーサルデザインについて五感を通して理解したこと）。
- ⑤補足、発展的意見

図1 紹介文作成の流れ

(7) 説明的文章により自らの発表原稿を書き、推敲する姿（繰り返し読み込み、自らの表現に生かし、高める。）

発表の構想を練る際、見本となる発表原稿を用意し、子どもたちとともに繰り返し読み込んでいった。また、原稿はより効果的な発表につなげるために、声の大きさ、強調、間のとり方、速さなどを工夫させるよう配慮して、音声化し、やはり繰り返し子どもたちに聞かせ、参考にさせた。

そして、一次原稿、二次原稿と、自らが音読する中で、また、隣同士、グループ内で発表しあう中で、より質の高

文化ホールで見つけたユニバーサルデザイン
私は、文化ホールにある大ホールの車いすの人のためのスペースについて調べました。そのことを紹介します。

はじめにその特徴を説明します。車いすの人のためのスペースは、出入り口に近い場所にあつて、このスペースに出入りするときは、段差がないため、楽にはいることができます。

また、車いすの人のために上と下と二つの出入り口がついています。上は、ふつうの人のことを考えて、下は車いすの人のことを考えて段差がありませんでした。

ここで写真を見てください。この写真から分かる通り、このスペースは、横長で人を囲むようになっています。また、このスペースの大きさは、縦約百二十センチ位で、6年生の大きさなら約八人位はいる大きさでした。

次に、車いすの人のためのスペースを調べてみて感じたことを説明します。

まず、このスペースが大ホールについているのは、車いすを利用して人々が映画や劇などのショーを見るのにとても便利だと感じました。

また、実際に車いすに乗っての利用はできませんでしたが、このスペースからステージを見ると、はじからはじまで見渡すことができました。

しかし、このスペースには、少し不便なことがあると感じました。なぜかというと、今の状態は、手すりなどがなく、一人で来た人にとっては、少し不便かなあと思ったからです。だからもっと手すりをつけるなどの工夫が必要かなあと思いました。

このように、ものや施設には、利用者や体の不自由な人のことを考えて作られていることが分かりました。このほかにも、水飲み場で、いろいろな人のことを考えて、工夫されている設備も見つけました。

いものへと改善していった。担任は、恣意的に表現内容に手を加えることはせず、あくまで子どもたち自身の向上的変容による、文章改善を期待した。さらに、子どもたちは、自らの文章に朗読のための記号を書き、伝える相手を意識した説得力のある、効果的な表現のため配慮していった。このことは、自らの書いた説明的文章を吟味し、より深い内容理解をすることにもつながったと言える。子どもたちが書いた説明的文章の例を前頁に紹介した。

(8) 発表をもとに意見交換し、表現を振り返る姿（振り返りを通してさらに質の高い提案へ発展させる。）

大グループでの発表会を目標に、まず小グループでの模擬発表会を行った。そして、子どもたちは自己評価、相互評価により、さらに自らの原稿を手直しし、目的や相手に加え、状況や場を意識した表現へと意識を向けていった。発表原稿にも、朗読記号を加除訂正する跡が、目立つようになった。実際の、発表会では、同様のユニバーサルデザインについて調べたもの同士が集まらないように編成したグループであったので、それぞれの発表に対し、子どもたちは新鮮な気持ちで耳を傾け、意見を交流しあった。その意見交流によりさらに深まった考えをもとに、再度提案文を書くという形で、論理的な文章表現力のさらなる向上を図ろうとした。児童による提案文の例を右に紹介する。

どんな人でも使いやすい「点字ブロック」を

〈はじめに〉
地域の皆さんへ。私たちは、国語の学習で、よりより町作りや学校作りについて考えました。その中で、私は郵便局の駐車場や通路で見つけた点字ブロックをもとに新しい案を考えつきました。ぜひいっしょに考えてみてください。

〈提案内容〉
郵便局の中にも点字ブロックの設置を
〈提案理由〉現状（今あるいろいろな工夫・事実）→問題（不便に感じること）→必要だと思うこと
郵便局は、多くの人が利用する施設で、ATMや切手の自動販売機など、いろいろなところに点字などがつけられています。郵便局の入り口あたりやATMのあたりには、点字と点字ブロックの両方がついています。
ただ、点字ブロックは、外の入り口から中に入るあたりにしかなく、郵便局内には点字ブロックはありません。せっかく郵便局の中に入ったのに、中が使いにくくなっていたら、目の不自由な人には不便だと思います。
そこで、私は、入り口のあたりだけでなく、郵便局内にも点字ブロックがついていると目の不自由な人も使いやすいと思い、設置を提案します。
このように、障害を持つ人たちの身になって、施設を工夫してほしいと思います。

6 研究の成果と課題

(1) 成果

① 問題意識を強くもち、追求意欲に支えられた体験的活動をもとに説明的文章を書き、表現力が向上した。

教科書の教材文や様々な資料をもとに問題意識を高め、子どもたちにとって身近で具体的な生活の場面に題材を求め、観察、調査しながら得られた情報を活用して、説明的文章（紹介文）にまとめることにより、子どもたちは目的意識に支えられた学習活動を行うことができた。特に、今回、実際の施設をユニバーサルデザインの視点から見つめ、様々な異なる使うものの立場に立って、自らの体で実際に試すことによって、ユニバーサルデザインの工夫や施設の利便性について、実感的な理解をもとにした説得力のある説明的文章を書くことができた。同時に、毎時間利用するワークシートを工夫したことにより、子どもたちが道筋に沿って主体的に学習を進めながら、説明的文章にまとめ表現する構想を立て、自らの力で文章に表現する力をつけることができた。

このように、問題解決的な学習による説明的文章の指導は、情報活用能力を子どもたちに身につけさせるとともに、全ての子どもに、説得力のある、論理的な文章表現

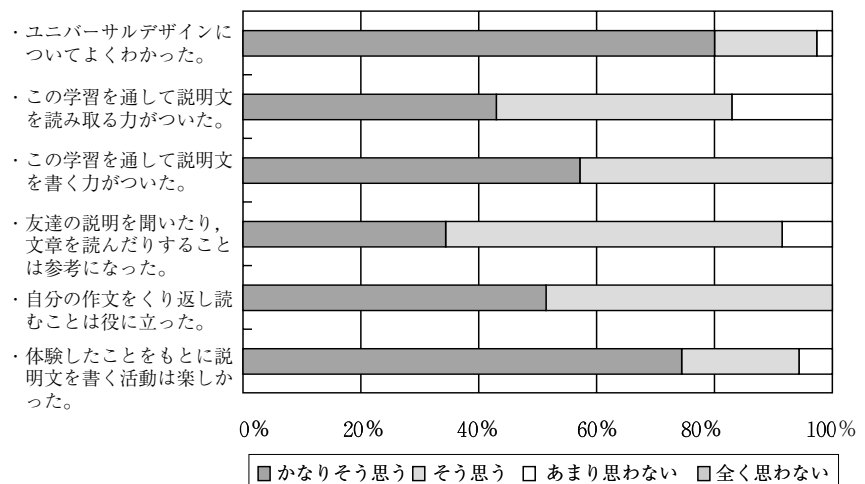


図2 学習後の子どもたちの自己評価（H17.10.26 35名に実施）

力を向上させる上で、有効であったと考える。図2の事後評価でも「体験を通した説明文執筆が楽しい」「説明文を書く力がついた」とする肯定的意見が多く、このことを裏付けている。

② 説明的文章を繰り返し読み込み、確かに表現する活動を通して、文章表現の技能を身につけることができた。

教材文にある説明的文章を繰り返し声に出して読み込み、思考の形式、論理の筋道、説得の構造、或いは、基本的な言い回しや接続詞の使い方などを確実に身につけることができた。また、自らが書いた説明的文章（紹介文）を伝える相手（聞き手）に配慮して何度も工夫して読み、読むことによって自らの表現を評価し、文章を改善しようとする態度を育てることができた。そして、強調したい点に注意して朗読記号をつけながら読み、自己評価、相互評価することを通して、子どもたちは、文章に表現する力の向上的変容を実感し、充実感をもつことができた。加えて、朗読する力、伝える力の向上も実感することができたと考える。事後評価において、全ての子どもが「読む」「書く」繰り返しによる効果を実感していることもこのことを実証していると言える。

（2）課題

① 様々な資料を活用した情報活用能力の育成とそれを生かした論理的文章表現力の育成が十分とは言えなかった。

今回の論述では、問題解決的学習活動において情報活用能力を育成し、その成果として、論理的な文章表現力の育成が図られたことをあげてきた。ここでの情報は主に、写真などの情報や見る、触れる、聞くなど体を使って得られる体験の情報などが中心であった。そのため、他の文章、図表などの資料については、導入において扱った資料以外になかった。情報活用能力を一層育成し、より質の高い論理的な文章表現力を育成していくためには、このような情報を活用する学習場面を計画的に設定していく必要がある。

② PISA型読解力の分析と説明的文章指導、及び文章表現力育成への応用を図ることが必要である。

当校では本年度、昨年度からの研究の延長線上に立ち、国語科を中心に、「考えること」を中核とした「読むこと」「書くこと」を連携させた指導について、実証的な研究を行おうとしている。論理的な文章表現力の育成においては、文部科学省で言うところの建設的な批判を伴う読み（クリティカルリーディング）の能力育成が必要な条件となると考える。教科書等における教材文を中心とした「連続型テキスト」とともに、前述した多様な情報である「非連続型テキスト」の批判的読みを、段階的、計画的に位置づけた、学習過程の検討が現在の中心的な研究課題となっている。今後も、目的意識をもって追求し、相手意識をもって論理的に表現できる子どもの姿を目指して新しい段階での研究を行っていく。

〈註〉

- 1) 2005年12月文部科学省 「読解力向上プログラム」では、教科国語はもとより各教科及び総合的な学習の時間等学校の教育活動全体を通じ、「考える力」を中核として「読む力」「書く力」を総合的に高めていく」必要を述べている。
- 2) 須藤昌幸 「文章を論理的に構成するための構成表の改善—段落の役割やつながりを明示する「論理的構成図」による試み」『教育実践研究 第15集』 上越教育大学学校教育総合研究センター，2005年，31—36pp
- 3) 尾矢貞雄 「説明文の論理性を自分の文章表現に生かす指導 —論理的な文章を書くために、教材文で何を学ぶか—」『教育実践研究 第16集』 上越教育大学学校教育総合研究センター，2006年，17—22pp

〈参考文献〉

「生きてはたらく国語の力を育てる授業の創造」刊行会『生きてはたらく国語の力を育てる授業の創造 第2巻 情報を集め、調べ、まとめることができる学習指導「横断的・総合的な学習」』（株）ニチブン，2000年，p.309
 前掲 『第7巻 論理的に書くことができる学習指導「書くこと2」』（株）ニチブン，2000年，p.271
 甲斐雄一郎他 『「書くこと」の指導 確かに豊かに「書く力」をつけるために』 光村図書出版，2005年，p.261
 高橋俊三 『講座 音声言語の授業4 音読・朗読・群読の指導』 明治図書，1994年，p.249